

東京オリンピック・ピック開催を支える 土木職員の想い

学生企画の新連載「学生が知りたい! 土木人の心意気」(全5回)では、学生編集委員がいま最も関心を寄せる職業やプロジェクトに携わる土木の技術者や研究者を訪れ、仕事の内容や仕事への心意気などを取材する。第1回は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック事業を選手村整備の面から推し進める東京都の土木技術者、前田啓太氏に話を伺った。

——東京都職員としてどのような業務を行ってきましたか。

前田——入庁から23年間、土木関係のさまざまな業務を行ってきました。土木の業務は多岐に渡り、道路の設計、新交通システムや地下鉄建設の現場監督、ニュータウン事業に係る調整、区画整理事業の移転折衝、市街地再開発事業などに携わってきました。それぞれ業務内容や取り扱う法律等が異なるため、配属が変わるたびにそれらを覚えるのが大変でした。担当の建設コンサルタントが倒産して、自分でCADを使って一部のコンサルタント業務を代行に行ったこともありまし

た。

2013(平成25)年からスポーツ振興局の招致戦略課という部署に配属され、オリンピック招致が決まるまで、招致活動の裏方を行ってきました。また、招致活動と並行して、招致が成功することを前提にオリンピック競技会場や選手村に関する事業スキームづくり等を担当しました。

——オリンピック招致が決定した瞬間、それに携わる職員として何を感じましたか。

前田——2020年のオリンピックが東京開催に決定した瞬間は、本当に嬉しかったです。招致のためにさまざまな方の努力を知っていましたし、私もそのサポートを行ってきましたから周りの職員と抱き合って喜びを分かち合いました。また、東京が評価された理

由の一つに、会場計画や強固な都市基盤が評価されたことも土木技術者として嬉しく思いました。しかしながら喜びは一瞬で、その直後に感じたのは、「責任の重いバトンが回ってきた」ということです。招致することがゴールだった方がいる一方で、われわれオリ

ンピックの施設整備に携わる職員はその瞬間が本当のスタートになりますから。

——招致が決定してからは、どういった業務を行っていますか。

前田——今は、中央区晴海地区に整備する選手村を担当しています。選手村



写真1 前田氏が過去に携わってきた土木事業



写真2 取材の様子(写真右側が前田氏)

[取材協力者] 前田 啓太氏

東京都 オリンピック・パラリンピック準備局
大会準備部施設輸送計画課 主査

MAEDA Keita

1965年生まれ。1989年に千葉工業大学土木工学科を卒業後、奈良建設(株)入社。その後1991年に東京都入庁。建設局、交通局、住宅局、都市整備局、スポーツ振興局を経て、現在に至る。





写真3 選手村建設予定地と前田氏

のうち都が担当するのは、都市基盤と宿泊棟等の恒久施設の整備になりま
す。宿泊棟は大会時には選手が寝泊ま
りし、大会後に改修してマンションに
なる施設です。

選手村の計画を限られた時間の中で
現実のものにしていくことは容易では
ないと毎日感じながら業務を行って
います。

選手村は、大会時、競技において選
手がベストな状態でいられるように、
利便性、安全性および快適性の面で高
い水準を満たす施設とする必要があり
ます。さらに、大会後には選手村レガ
シーを活かした魅力あるまちにしなけ
ればなりません。

また、都のオリンピック関係の窓口
として、都市整備局、港湾局、財務局
IOC、組織委員会、国、地元区、民間
事業者、周辺住民の方々など、多くの
関係者との調整が必要になります。関
係者のオリンピックに対する考え方は
それぞれ違います。オリンピックを成
功させたい、良いまちをつくりたいと
いう思いは皆同じですが、必ずしも同
じ方向を向いているとは限りません。
オリンピック大会時に良いものであり、
かつ後利用として魅力的なまちづくり
も考えなければなりません。それぞれ
の立場によって選手村に求める像が異
なるので、それを一つの方向にまとめ
ていくことが大変だと感じています。
——調整役として心がけていることは
何でしょうか。

前田——さまざまな立場の方との調整
が必要となる中で、私が工夫している
ことは二つあります。

一つ目は、「相手と本音で話せる空
気をつくる」ということ。お互いが本
音で話し合えなければ、これだけ大き
く多様な要素を持ったプロジェクトは
思うように進みません。そのため、
相手の立場を理解したうえで調整する
ように心がけています。また、難しい

内容の会議であっても冗談を交ぜたり
して、本音の話し合いができる空気を
つくることを心がけています。

そして二つ目は「自分を良く見せよ
うとして、背伸びをしない」というこ
と。技術者として日頃から知識を深め
て職務に当たる必要はありますが、相
手が知っていて自分がわからないこと
に対して、わかったふりをせずに素直
に「わからない」と言い教えてもらっ
て心がかけています。私が携わって
いる職務は、面整備や港湾施設等の土
木技術的なことから、まちづくり等の
都市計画、建物整備の建築的な技術、
交通量予測、環境影響評価、再生可能
エネルギー、オリンピック・パラリン
ピックの条件、敷地鑑定や不動産、住
民折衝、予算決算等、多岐に渡る事項
を理解しないとイケません。これらの
ことについてわからないことは、その
道の専門家に教えてもらいながら仕事
を進めています。オリンピックは、そ
うやって多くの人の知恵や力を最大限
に活かしていかないと目標を達成でき
ない事業だと感じています。

——今後の目標を教えてください。

前田——私たち選手村担当としての
「成功」とは、無事にオリンピックが開

催・終了することはもちろんのこと、
オリンピックレガシーを活かしたまち
づくりができて初めて「成功」と言え
ます。選手村だった場所を人びとが快
適に暮らせる空間にするためにも、私
たちはこれからも関係者の方々と一緒
に、大きな目標の実現に向かって全力
を尽くしていかなければいけないと感
じています。

——最後に、読者の学生へのメッセー
ジをお願いします。

前田——私が今までの経験を通して学
生の間でやるべきと感じたことは、さ
まざまな人とコミュニケーションをと
ることです。研究室にこもってばか
りいしないで、自分と違う考え方・感覚
の人や異性など、さまざまな人と積極
的にコミュニケーションをとる。そう
いったことが気軽にできるのは学生時
代だけだと思います。私も学生時代に
さまざまな人と接してきましたが、そ
の経験が今でも調整役として役立って
いると感じます。社会人と比べて自由
な時間が多いなかで、遊ぶのも自由で
すし、勉強するのも自由ですが、自分
が有意義だと感じる時間を多く過こし
て欲しいと思います。

(担当編集委員：山下優輔、久松明史)